

昭和卅五年二月一日 第三種郵便物認可
平成四年三月一日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 沖 第38巻第1号



俳句雑誌「おき」

4月号

沖發行所

貝柄杓

能村 研三

俳人の訃報

二月終りから三月にかけて、俳人の訃報が相次いだ。

二月二十五日、「雲母」主宰であった飯田龍太さんが亡くなった。

生前直接お目にかかる機会が数回あったが、私がある新聞に発表した句を覚えていくでさりとて、誉めていたことが印象に残っている。その飯田龍太さんが一九九二年に蛇笏から引き継いだ主宰誌「雲母」を九百号で終刊されたときは俳壇に大きな衝撃を与えた。それも自分に厳しかったから故のことだったと言われている。明治生まれの登四郎と俳壇での活躍の時期が同じで登四郎とも親交があった。

名 の みの 寒 思 ひ の ま ま の 鋏 捌 き
名 残 雪 箱 階 段 に 匠 の 名
耳 袋 し て 負 け ん 気 を 通 す か な
帰 る た め の 旅 つ ま ら な し 春 北 風

三月一日に大島民郎さんが亡くなった。「馬酔木」の古い同人で、晩年は「椽」同人として活躍された。清らかに風景を詠んだ「高原俳句」で知られた。かつて私が初学の頃、三年ばかり「馬酔木」に投句をしたことがあったが、その時「二句入選の秀逸句を批評する欄」を担当された大島民郎さんに「青林檎置いて卓布の騎士隠る」が採り上げられ、温かい批評をしていただいた。この時喜んだのは、私よりむしろ登四郎で、

料峭の深慮の十指開きけり

志賀海神社

貝寄風や鹿角万本潮枯れて

春光の御潮井掬ふ貝柄杓

御潮井は春日まじりの神の砂

春潮は砂洲の細みを責めてをり

志賀島の荒雄の裔や和布刈る

後に処女句集を出すときに登四郎が「騎士」という題名をつけてくれたのも、大島民郎さんが誉めてくださったのを覚えていたからだろう。

そして三月三日には「冬草」主宰の高橋謙次郎さんが亡くなった。高橋さんは「若葉」門で、加倉井秋をに師事され、後に「冬草」を継承された方だが、市川の「島村」という老舗のお菓子屋さんでもあったので、登四郎の所によく出入りしておられた。そして誕生日の一月五日には毎年特製のパースデーケーキを頂き、その年齢の数のローソクも忘れることはなかった。「冬草」の記念会で何度か講演したこともあり、結社が違っても親しいお付き合いをした方であった。

登四郎の七回忌も間近になったが、登四郎と親しい俳人が相次いで亡くなり、感慨深いものがあった。謹んでご冥福をお祈りしたい。



能村 研三

早春譜

林 翔

しるし

私の少年時代、講談社の「少年倶楽部」「少女倶楽部」が創刊される前から有ったのが、博文館の「少年譚海」であった。

或る年の三月号かと思うが、書店で「譚海」を買うと、裏表紙いつぱいに絵入りの尻取りうたが載っていた。面白いので何度か読んでいる内に、すっかり頭に入ってしまった。

白いの赤いの桃の花

鼻ぶく提灯ぶら提灯

狎曳き官女は緋の袴

蒲鉾はんべん薩摩揚げ

揚羽の蝶に紋白蝶

調子合はせてひゅうどんちゃん

ちゃんちゃんばらかたき敵討ち

打ち出の小鐘は大黒さん

三遍廻ってお辞儀しろ

これで最初の「白いの赤いの桃の花」に戻るから、いつまでも続けられるのである。

子供を楽しませる為の尻取りうた

遠き国には戦雲あらむ初霞

立て直す身の芯ありや強東風に

紅梅の千の蕾を見較ぶる

微雨を得て色滴れり紅梅は

紅梅は光の精か雨後晴天

恋猫を見つむるのみや去勢猫

伊達の薄着水色なりし春の風邪

青しとも見ゆる白壁よ春日燦

後樂園

百とせの苔を褥や落椿

高塔下また春燈下君在りし

故飯田龍太氏を偲ぶ

(共に「塔の会」会員なりし)

に乗せられてしまったわけだが、言葉で遊ぶという点では、昔の俳諧に通じるものもあるだろう。

一茶の「はつしぐれの巻」を最初の方だけ掲げる。

御宝前にかけて奉るはつしぐれ 一茶
文化十年十月吉日 魚淵

酒だるに枯梗かるかや菱書いて 同
わらぢ掃きこむ背戸の入海 一茶
ありあけの左明りの長閑さに 同

梅一本も我が世なりけり 魚淵
ふとん着て寝たる山から先霞む 一茶
大福餅でまねく旅人 同



蒼茫集



風 二月

辻 直美

風二月桑の木にぎり拳かな
取り囲む空気にちから水仙花
いまおもへば露の臺ほど力持
裏木戸に鳥の植ゑたる実千両
慈姑剥く地球すこしづつ腐蝕
栓抜けば小さき渦巻涅槃西風

小石川後楽園

北川英子

風騒とや受験最中の文京区
後楽園とところどころの青き踏む
両の掌をつぼめほのぼの露の臺
水戸様の上屋敷借り鳥の恋
春風やドームいまにも飛行船
寒牡丹の終焉なんとしどけなし

麦 萌ゆ

成宮紀代子

草萌や傘を返しに傘をさし
追伸の方が本文春立てり
鳥帰る郷に布令出る寺普請
唐風の古蹟をちこち梅真白
乗り越したらしき風景麦萌ゆる

木の素姓

佐山文子

裸木となりて見直す木の素姓
すこし酔ひすこし淋しき春夕べ
天にさ迷ふ風船の還るなし
築地堀の内は大江戸のどけしや
脈々と光圀の梅香りつぐ

立春大吉

楠原幹子

笹鳴や簾に小さき靴干され
みつみつと蜜をたくはへ冬林檎
冬の鴟部屋の奥まで日の入りて
日脚伸ぶ木立の影のバーコード
立春大吉迷はず十年パスポート
円月橋水面に春の日のかけら

合格子

安居正浩

煉炭の虚ろなる眼の昭和かな
金柑をつれない甘さだと思ふ
待ち人は来ず雪吊に雪は来ず
合格子いま風となり鳥となり
如月のぱかんと開けてシーチキン
オペラグラスの中に目を剥く春芝居

黄金走り

千田百里

高千穂を黄金走りや畦焼く炎
畦を焼く太き眉根に言問ひぬ

夜神楽へ星のつぶてを浴びながら
夜神楽を抱き千年杉の闇
鷹鳩と化し居酒屋の会議かな
地虫出てどちらの後楽園へ行こ

句碑周り

望月晴美

字碑句碑

句碑周りつつじちらほら返り咲く
両の手で息を囲へり初氷
競ひ立つものは叩かれ野焼の火
きびきびと男まさりや畦を焼く
教会の鐘鳴りわたり揚雲雀
引鶴の直なる頸に迷ひなし

雲の色

池田

崇

これと言ふ悩みもあらず懐手
決じ開ける力を持ちて隙間風
雪起しめげずに力溜めて来し
雪催とは不機嫌な雲の色
かまくらの零れ灯滲む厚戸口
小かまくら灯守屈背の灯を縫へり

潮鳴集



水のことば

富川 明子

サイフォンに湯気立て寂聴源氏かな
寒牡丹ひと拒むかに白つくし
雪解川水のことばのあふれだす
地卵に和毛ひとひら春立てり
春浅しぽつりと貝の息吐いて

冬の雷

佐久間 由子

風紋の砂丘が蒼し冬の雷
一途とふ見えざるものへ冬木の芽
白梅の香に忽然と逝きしかな
喪ごころに寒紅梅のひらきけり
夫の亡き門に柀挿しにけり

高きに申す

服部 早苗

数行の略歴の間冬木の芽
朴の木の高きに申す御慶かな
物件が窓うめつくす建国日
受験子や鉄腕アトムの発車ベル
タイマーをかけて撮らるる春愁

寒波

掛井 広通

曲線はどこに集まる冬林檎
海底の山脈尖る淑気かな
寒波来る 60階の風の色
一瞬で消ゆ新宿の雪をんな
さまざまな地へ発つ切手春隣

沖作品



能村研三 選

神奈川

菅原 健一

湯冷めして芯だけ熱き恋のこる
春寒のたびごと酔ひの濃くなれり
気骨ある風もありしと冴返る
早春といふ皺のなき語感かな
街に出て人待ち顔の春に会ふ
大鷹に天空を刺す一樹かな
鮫鱈を捌きし足どりで来たる
朝市の水仙潮風に束ね
濯ぎ干す物にひかりや春隣
春淡し十倍粥の離乳食
春立てり光あつまる泡立て器
泡のまま乾く石鹼春浅し
鳥雲に鍵また鍵の貸金庫
春の風邪ミルクコアの膜すくひ
春一番来よスクランブル交差点

茨城

内山 花葉

東京

小嶋 洋子

神奈川

堀口 希望

絵一枚替へて喪中の大旦那
天頂の鷹ならずやといふ飛翔
誰が行きし雪の比叡の阿闍梨道
窯出しの皿に風花吸はれけり
無聊かな立春の卵立ててみる
フラスコをのぼつて来たる冬の音
下敷に砂鉄立たせてある冬日
あらたまの瀬戸のほんじほひとつまみ
空色に塗られ小春の鉄アレイ
白鳥の首たをたとひきよせり
指長き木喰仏の淑気かな
ひとり乗るエレベーターの淑気かな
凧や昔は旅に果つること
廻し読みして源氏名の賀状かな
蔓枯れてその実も枯れて基地フェンス

千葉

篠藤千佳子

栃木

橋本 和子

沖作品 15句選評

*
能村研三

湯冷めして芯だけ熱き恋のこる 菅原 健一

菅原さんも神奈川支部に所属する占ぐからの会員で、今年こそ頑張つてほしい人の一人であるこのような句の鑑賞は中々難しいが、やや意味深な句とも思える。「俳句朝日」でも今月は、「恋の句」特集。「恋の句」は俳句を詠む永遠のテーマでもある。「湯冷め」という季語は、何か艶めいた感じを与えるもので、湯冷めをするところかが漣立つような気がする。身体そのものは冷えても、恋心は人間の心の芯の部分にあつて、むしろ熱くなるばかりである。

大鷹に 天空を指す 一樹かな 内山 花葉

女性の作者にしては雄々しいスケールの大きな句である。大鷹が悠然と滑空すると、時空を超えた何かの啓示を受けたような思いに浸る。高く澄明でそして優しい天空の輝きの中を真っ直ぐに高く伸びる一本の樹。鳥の中でも王者の風格をもつ大鷹。古来鷹狩りにも用いられた。「青鷹」とも言つて生後三年目の鷹のことでもある。省略された一景の中に、大鷹の存在と天空

の聳える大きな樹、絵画的な構成の中に何かを訴える力のある句である。

泡のまま 乾く 石鹼 春浅し 小嶋 洋子

この句は素材が珍しいわけではない。どちらかと言えば、あるものの中であつても、このことは句になかつただろう。冬の寒さの残っている「春浅し」という季語の斡旋も適確であつた。

絵一枚替へて 喪中の 大旦 堀口 希望

喪中の時のお正月は、本来は注連飾り、鏡餅など正月用の飾りやおせち料理、初詣、年賀状などの正月行事は一切控えるものとされている。しかし、最近はお正月の色々な行事を行うご家庭も増えている。故人を偲びつつ静かに迎えるお正月のだが、新年を迎えるにあつて、自分自身何かけじめをつける気持があつた。せめて、いつもかかウている応接間の絵を替えることにした。気分も新たに迎えることが出来た大旦であつた。

フラスコをのぼつて 来たる 冬の音 篠藤 千佳子

中学のときの理科の実験を思い出した。余り得意な方ではなかつたので、正確な記憶はないが、フラスコに入れた水が温まると水位が上昇することがあつたように記憶している。その時音を立てていたかはよく覚えていないが、透明なガラスで出来たフラスコを昇っていく水と、無機質な冬の理科実験室の中でぼこぼこ音を立てていく様子に何か不思議なものを感じた。
(以下略)